

2017年1月29日 MJCC 主日礼拝メッセージ 柏倉秀吉師

聖書：マルコ4：1－34

タイトル：『聞く耳のある者は聞きなさい』

---

マルコ4：1－34。

イエスはこの箇所ですべて弟子たちに、「神の国」について5つの例えをもって話をされた。5つの例えをそれぞれ確認したい。

1 v 「イエスはまた湖のほとりで教え始められた。」とある。この「また」とは、「2度目」という意味で強調されている言葉である。

これまでイエスは、主にユダヤ人の会堂で御言葉を教えてこられたが、律法学者やパリサイ人達は良い思いで見えてはいなかった。安息日の話題からは、いよいよ「どのようにして葬り去ろうか(3:6)」と、イエスに殺意まで向けるようになった。それゆえイエスはガリラヤ湖に退かれ、さらにそこで宣教を続けたのである。

しかしイエスに対する非難は住民の中からも出て、「気が狂ったのだ(3:21)」という噂があったのである。それで身内の者達はイエスを連れ戻しに来たのであった(3:21)。

けれどもイエスは、はっきりと「御心を行う人は誰でも、わたしの兄弟姉妹、また母なのです(3:35)」と、「神の国」の重要性を身内の者に対しても明確に語られた。イエスはそれほどまでに決然とした態度で「神の国」のことを語られたのだが、ガリラヤ湖に集っていた弟子たちははじめ群衆は、そのことをほとんど理解していなかった。

それゆえ再びイエスは、「また」湖のほとりで教えをはじめられたのである。しかしイエスは、「神の国」について「たとえ」でしか彼らを教えなかったのである。

「たとえ」とは、人々がある物事をイメージしやすくする「例話」のことである。聞いている者にとって分かりやすいものでなければ意味がない。私は本当によく失敗してしまう……が、

イエスはそうではない。物事を完璧にとらえ、適切な「たとえ」をもって語られる。ゆえにこの時、イエスのたとえを聞いていた群衆は、その話自体はイメージしやすく、よく理解できたと思える。

けれどもイエスが話された「神の国のたとえ」とは、単なる知性だけで理解できるものではない。そこには霊的な理解が必要であった。ここに主なるイエスの「たとえ」の奥深さとまた難しさがある。イエスはあえてそうされたのである。

それゆえイエスはこの一連のたとえ話の中で2度(4:9, 23)も「聞く耳のある者は聞きなさい」と、『よく霊的耳を開いて「聞く」ことがなければ解らない。』と、彼らに注意を与えたのである。

さて、一番初めのたとえは「種まき(3-8)」のたとえである。

当時、農夫は、畑の中を行巡りながら種を蒔いた。あるいは穴をあけた袋に種を入れ、ろばに背負わせ無くなるまで畑の中を行き来させることもあった。

当然、畑の中の小道（農道）に落ちる種もあった。それらは鳥たちの格好の餌になった。

また岩地に落ちる種もある。土は深くないので太陽の熱で温まるとすぐに種は発芽する。しかし、深く根を張っていないので成長を続けて行くのに必要なものを吸収することが出来なく、暑い日があれば、枯

れてしまうのである。

さらに、茨の中に落ちる種もある。茨は繁殖力が強いので、蒔いた種は負けてしまい実を結ぶことができないのである。

しかし良い地にまかれる種は、30、60、100倍の実を実らせることができたのである。イエスは、「神の国」とはこうした農夫の経験によく似ていると言われたのである。そしてイエスのたとえ話はここで終わる。

さて、これだけを聞いて「神の国」のことを本当に理解できる人々はいらるだろうか？いや、誰も居ない(かった)のである。

しかし、それにも係わらずこの「たとえ」の意味を『知りたい！』とイエスを尋ねて来たのは、「いつもつき従っている人たちが12弟子と共に、これらのたとえのことを尋ねた(10v)」と、彼らだけだったのである。

イエスに質問して良いのは、いつもつき従っている人々と12弟子たちだけでなければならないということでは無い。全ての人々がいつでもイエスに尋ね、質問することが出来るのである。イエスは何も群衆に対して垣根を作ってはいない。けれども、そのほとんどの者がこの「種まきのたとえ」を聞いて、それ以上疑問を持つことも、さらに深い内容を聞き出すことも一切しなかったのである。

．．．

なぜか。それは彼らにとって、このイエスの話は、それ以上彼らの興味の無いことだったからである。彼らの興味はダビデ王の様なローマ帝国の支配から救い出してくれる強いヒーローとしての救い主なのである。

ここに弟子たちと群衆との大きな違いがある。

弟子とは、神の国についてすべての知識を持ち、意味を明確に知っている者というのではない。むしろそのこと『本当に知りたい！』と飢え渴き、神を求め続けている者と言える。それゆえイエスは、そうした弟子たちだからこそ「あなたがたには、神の国の奥義が知らされているが、他の人たちには、すべてがたとえで言われるのです。(11v)」と語られたのである。

一方、群衆に対しては12vにあるように「『彼らは確かに見るには見るがわからず、聞くには聞くが悟らず、悔い改めて赦されることのないため』です。」と、非常に厳しいことを言われたのである。イエスは「神の国」のことを知りたいと願う者には、「神の国の奥義」を明らかにして下さるのである。

．．．．．

そしてイエスが「たとえ」を話された目的は、何より「神の国の奥義」を伝えることにある。その「神の国の奥義」を知らずに、単に『たとえ話』を聞くだけでは、本当に意味がないのである。

弟子たちは、まさに最も大切で重要なことをイエスに尋ねたのである。つまり『わからないので教えてください！』と、恐れずにまたは謙虚にへりくだって、「聞く」ことができたのである。

それこそがまさにイエスが言われた「聞く耳のある者は聞きなさい」との信仰者の姿勢そのものなのである。

14v から弟子たちに対してイエスの解き明かしが始まる。

種とは、御言葉のことである。そして蒔く人とは神のことである。そして蒔かれる場所とは私達の心あるいは信仰といえる。

道端に蒔かれる人とは、御言葉をすぐにサタンに持ち去られてしまったのである。「神の御言葉」を見なくてもいいように、「真理」についてサタンから覆いが掛けられ、神のことばが大切であるとさえ気づいていないのである。その人にとっては、「御言葉」などどうでもいいのである。ゆえに「御言葉」をサタンにえさとしてあげているのである。

岩地に蒔かれた人とは、神のことばは大切だと判り、表面的には喜ぶのだが、状況が悪くなったり、いろいろ自分にとって不都合があると信仰を簡単に捨ててしまうのである。時の権力や周りの状況に弱い人と言える。結局、その人にとって「神の御言葉」はそれほど大事なことではないのである。

茨のなかに蒔かれた人とは、神と自分の欲を天秤にかける人と言える。そして神よりも自分の欲がいつも勝るのである。現代的に言えば、バブル人間とも言えるかもしれない。こういう人もまた、「神の御言葉」と「神の国」はこの世の富に劣るものと思っているのである。この世の富には目を輝かせるが、何よりも豊かな「神の国」には目を輝かせないのである。

最後の良い地に蒔かれる人とは、「神の御言葉」をこの世の状況やまた世の富よりも大切だと解り、「神の国」を一心に見つめて離れない人である。そういう人は「神の国」の実を豊かに結ぶのである。

これらの蒔かれた「種」はすべて「神の御言葉」という完璧な種なのだが、それを蓄え育てる自分の心と信仰の状態がそれぞれ異なるのである。原因はすべて自分にあるのである。

更にイエスは、21-22vで「明かり」のたとえ話をされた。この「明かり」もまた「神の国」の

．．．

ことであり、それは必ず現れ、明らかになるものであると断言したのである。つまり、この『神の国を待ち望む者は、決してその報いから漏れることはない』ということをごここで語られたのである。

また24-25vでは、「量り」について語られた。この「量り」は「神の御言葉」をよく注意して聞いている信仰の「量り」である。つまり自分がどれだけ「神の国」を大切にしているかという信仰の基準が、結局は神から与えられるか取り上げられるかということにまでつながるのである。

しかしその信仰とは、自分自身がすぐれた者だから素晴らしい信仰を持っているというのではなく、あくまで人手によらず成長させてくださる神がそれぞれに与えてくださるものなのである(26-29v)。

すなわち私達が出来ることとは、どれだけ神のことばを「聞く」か。ということなのである。

最後のたとえは「からし種」のたとえである。

イスラエルの中で「からし種」とは、「最も小さいもの」の代表として語られている。その本当に小さな物であっても、成長すれば、誰の目にも明らかになるほど大きくなり、そして敵を警戒する鳥でさえも安心して巣をつくるほどになるのである。

つまり「神の御言葉」という「種」はこの世の中ではどんなに小さく扱われていても、後に表される「神の国」は、だれの目にも明らかほど大きく、全ての者の安心(安住)の場所として与えられる確かなものなのである。

．．．．．

これほど大切に重要なことを群衆は聞かなかつたのである。

私達はこれらのことから、2つの大事なことを教えられたい。

①「聞く耳のある者」となり、いつでもどんな時でもイエスを尋ね、聞く信仰者でありつづけたい。もし一人一人が御言葉と祈りにより神との豊かな交わりを直接持てるならば、牧師は必要ないのである。

②神は、神を尋ね真理を「聞きたい」と思う者には、たとえご自分の命を投げ出し(キリストの十字架)でも「神の国の奥義」を完璧に解き明かして教えてくださるのである。神はそれほどまでに私達に「神の国の奥義」を知らせたいと願われているのである。

最後にイザヤ1：18-19を読んで終わりたい。

「さあ、来たれ。論じ合おう」と主は仰せられる。「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。もし喜んで聞こうとするなら、あなたがたは、この国の良い物を食べるができる。」

今日も「聞く耳のある者」として信仰の歩みをしていきたい。アーメン。